

平成三十年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十六ページである。脱落している場合は、ただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

犬が歩いているとする。私たちはそれをさまざまな仕方でも描写しよう。まず、歩いているそれを「犬」という語で表わしてもよいが、その犬種がブルドッグであるならば、「ブルドッグが歩いている」と描写してもよい。あるいは「太りすぎのブルドッグ」と描写するかもしれない。人によっては「かわいい犬」と言うかもしれないし、「こわい犬」と言うかもしれない。また、「歩いている」という描写も、「散歩している」と言ってもよいだろうし、「運動している」と言ってもよい。「なんだかヨタヨタしている」と描写できるかもしれない。もちろんそうした記述をするためには、「犬」「ブルドッグ」「歩く」等々の概念をもっていなければならないが、私たちは自分がもっている概念の中から適当に⁽¹⁾シユシャ選択して、その概念を用いてものごとをさまざまに描写するのである。

あるものごとを言葉で言い表わすとき、一つのものごとに対してさまざまな言い方が可能となる。そうした、ものごとを描写する表現を「記述」と呼ぶことにしよう。「犬が歩いている」という文はもちろん記述であるが、「犬」という語も記述であり、「太りすぎのブルドッグ」という句も記述である。「犬」という語を記述と呼ぶのは少し違和感があるようにも思われるが、ここでは語、句、文のいずれの形であれ、あるものごとを描写する言葉をすべて記述と呼ぶことにする。

^(a)「一つのものごとはさまざまに記述されうる（記述の多様性）」——これが、まず確認しておきたいポイントである。

目の前のものごとをどう記述するかは、そのものごとに対してどのような関心を、どの程度強くもっているかに依存している。たんに「犬がいる」と記述して満足し、それ以上の関心をまったく示さない場合もあるだろうし、犬がいま何をしているかにも関心を示すならば、「犬が散歩している」と記述するかもしれない。あるいは、それを「ブルドッグ」と記述し、そのブルドッグ特有のヨタヨタした歩き方に注目し、さらにブルドッグにしても太りすぎであると見てとるならば、「太りすぎのブルドッグがヨタヨタ歩いている」と記述するだろう。

そうした記述は、それに特有の典型的な物語を開く。「犬がいる」であれば、典型的な犬の物語を開くだろう。もちろん、

目の前の犬（「ポチ」としよう）には、ポチに固有の物語がある。そこには典型的な犬の物語に収まらないこともあるだろうし（ポチはよく鼻水を垂らす、ポチは今朝飼い主に怒られた）、典型的な犬の物語に反することもあるかもしれない（ポチはけっして「ワン」とは鳴かず、「アーウ、アーウ」と変な声で鳴く）。だが、「犬がいる」という記述に満足する人は、そうしたディテールには関心をもたない。ただ、目の前のものごとを「犬がいる」と記述し、それが開く典型的な犬の物語の内にそれを位置づけて終わらせるのである。同様に「犬が散歩している」と記述して満足する人は、そこに典型的な犬の散歩の物語（飼い主とともに家を出発して、近所を一周して家に戻る。その時間は数時間以上にわたることはない。犬は散歩を喜び、散歩の間に排泄^{はいせつ}をする、等）を開く。

かくして、記述はそのもとに典型的な物語を開き、目の前のものごとをその物語の内に位置づけることになる。そしてこれが、相貌に反映される。それゆえ、たんに「犬がいる」と記述して満足する人、「犬が散歩している」と記述する人、「太りすぎのブルドッグがヨタヨタ歩いている」と記述する人、それぞれが、その記述に応じた相貌でそれを知覚するのである。

^(b)ただし、どんな記述でも相貌に反映されるというわけではない。たとえば、Aさんが飼っている柴犬とBさんが飼っている柴犬に対して、私は「見た目では区別がつかない」のように言いもする。この場合には、「Aさんが飼っている」「Bさんが飼っている」という記述は、私にとつてのその二匹の犬の相貌には反映されていないと言える。あるいは、スカイツリーは墨田区押上一丁目にあるが、一丁目だろうが二丁目だろうが、あるいは墨田区ではなく台東区であつたとしても、少なくとも私にとつてその記述はスカイツリーの相貌には反映されない。では、どのような記述が相貌に反映されるのだろうか。

記述が相貌に反映される程度は連続的なグラデーションをもっている。大きく相貌を左右する記述もあれば、わずかにしか左右しない記述もあり、まったく相貌に影響を与えない記述もある。どのような記述がより大きく相貌に影響を与えるかについて、私はここで明確な答えを与えることはできない。しかし、知覚の役割がいま現在の主体の行動を導くことにあるのであれば、いま現在の行動に影響を与えるような記述が相貌に大きく影響を与え、将来の行動にのみ関係したり、あるいはほとんど行動の仕方に関係してこない記述の場合には、相貌に与える影響も小さくなると考えられる。それゆえここでは、記述のす

べてが相貌に反映されるとまで言うつもりはない。さしあたり、記述は相貌に反映され、^(c)ことを確認しておきたい。

実際、私たちのふだんの経験を振り返ってみれば、関心と記述に応じて知覚される相貌が異なる場面がごくふつうにあることを実感できるのではないだろうか。たとえば駅で駅員を見る。多くの場合、私たちはその人をただ「駅員」としてしか記述しないだろう。そしてそれ以上のディテールには関心をもたない。もちろん、その駅員（山村さんでしょう）には見かけ上の特徴にかぎってみてもさらなる細部が見出される。山村さんは中年男性であり、痩せていて、眼鏡をかけている。だが私は、駅で電車に乗るときにそんなことには関心をもたない。改札を通り、電車に乗ろうとしている私の物語の中で、その人は駅員という役どころだけを与えられている。それゆえ私はその人を、ただ駅員という相貌で見ることになる。もしなんらかのきっかけがあり、その人と親しくなったとする。そのとき、私は彼により強い関心を向けるようになり、私が山村さんを捉える記述もいつそう細かいものとなるだろう。そしてそれに応じて、私にとっての山村さんの相貌も変化するに違いない。

おまけとして、もう一例、問題の形で出してみよう。あなたは急な坂の上においてその坂を見下ろしている。そのとき、あなたにはそれが「上り坂」に見えるだろうか、それとも「下り坂」に見えるだろうか。

あまり考えずに答えるならば、坂の上から見下ろしているのだから、それは下り坂と記述され、下り坂の相貌をもつと答えなくなるだろう。だが、坂の上から見下ろしているとしても、つまり、眺望点は同じでも、それを上り坂として記述する物語を考えることはできる。あなたはいまその坂を上ってきた。そして振り返り、きつい上り坂だったと思う。そのとき、あなたには見下ろしているその坂が上り坂に見えているだろう。あるいは、坂の上において下からその急坂を上ってくる人を待つているときにも、その坂は上り坂に見えるに違いない。つまり、ある坂が上り坂に見えるか下り坂に見えるかは、どこからその坂を見るかによるのではなく、その坂を上る物語の中にあるか、その坂を下る物語の中にあるかによる。それゆえ、そこを行き交う人も動物もいないのであれば、「上り坂」の風景写真を撮ることは不可能である。「坂」を見上げる写真を撮ることはできる。しかしそれだけではその坂は「上り」とも「下り」とも言えはしない。^(c)「上り坂」は物語の中でしか表現できない。

記述が物語を開き、相貌を生み出すきわめて独特で興味深い事例が、ない、ということの知覚である。ないものは見えない。

それは眺望という意味ではその通りである。知覚の眺望点の対象との位置関係であるから、対象がない場合には眺望点を設定することもできない。それゆえ、存在しない対象の眺望は存在しない。もちろん、「ここからはスカイツリーは見えない」と言うことはできる。しかし、それは「見えない」ことの報告である。^(d)いま問題にしたいのは、「見えない」ということではなく、「ないということが見える」ということである。

たとえば、よくある手品だが、右手にもったコインを左手に握らせ、右手で左手の上を思わせぶりにさすった後で左手を開くと、コインが消えている。右手も開いて見せるが、右手にもコインはない。このとき私たちはコインの消失を見るのではないだろうか。あるいは、私たちは瓶の中にもうビールが残っていないことを見る。

これに対して、知覚のレベルで成り立っているのはあくまでも「瓶の中にビールが見えない」ということだけであり、それをもとに「瓶の中にビールがない」と判断するのだと言われるかもしれない。これはおそらく自分の体験を反省してみることは決着のつかない問題だろう。それゆえ、ある程度、「知覚」をどのレベルで捉えるかという理論的な決断の問題となる。

だが私は、ここまで論じてきたように、「知覚」を豊かな内容をもちうるものとして捉えるべきだと考えている。週末のハンカガイなどで大勢の人たちを見る。私たちは「人」という意味から中立な何ものかを見ているのではなく、まさに「人」を見ている。同様に、私は、そこに「大勢の人たち」を見ているのだと言いたい。多いとか少ないといったことは中立な何かを見て、その後で付加的に「大勢」と判断するのではなく、私たちは知覚においてタンテキに「大勢」と見てとっている。あるいは、ビールがもう瓶の五分の一ぐらしかなくなっているとき、私たちはそれを「ビールが残り少ない」という相貌で見るだろう。ならば、空のビール瓶を「ビールがもうない」という相貌で見るのではないだろうか。

ここで、不在の相貌のもとに見られるのは、あくまでもそこにあるものである。つまり、そこに存在しないビールを「ない」という相貌で見るのではなく、テーブルの上にあるそのビール瓶を、ビールが入っていないという意味のもとに見る。あるいは開いた手を、そこにコインがないという意味のもとに見る。そこにあるものが、他のあるものがそこにはないという相貌で、見えるのである。

だが、「ないことを見ることができる」と認めたとして、そこにはなお考えねばならないことがある。手品の例を出しておいた。私たちは開いた左手にコインがないことを見て驚く。では、手品でもなんでもない場面で、ただ私が手を開いて見せたとき、あなたはそこにコインがないことを見るだろうか。私たちはコインのことなど話題にしてもいなかった。そして私は、ただ左手を意味もなく開いて見せる。もちろんそこにコインはない。そのような場合には、私たちはそこにコインがないことを見はしないだろう。もし、それでも「左手の上にコインがないことを見ている」と言い張るのであれば、あなたは他にもいろいろなものがないことをそこに見ることになる。私の左手の上には、饅頭まんじゅうもない、⁽⁴⁾カンデンチもない、宝石もない、手乗り文鳥もない。それら文字通り無数のものたちの不在を見なければならぬ。

では、ないことを見るのはどういう場合だろうか。まず、「当然あるはずだ」という予期が裏切られたとき（コイン消失の手品）、あつてほしいという願望が満たされないうとき（空のビール瓶）といった場合が考えられる。あるいは、「ない」ことに積極的な意味を見出す場合もある。たとえばレンタカーを返すときに車体に傷がないことを確認するといった場合である。いずれにせよ、おおまかに言って、ないことが意味をもつような物語がそこに開かれている。具体的にどのような物語が開かれているかはさまざまであるが、少なくともそれがないことによつて物語の展開は大なり小なり影響を受けることになる（ビール瓶が空になった場合、あるいはレンタカーに傷がない場合を考えてみよう）。

さらに、私はその物語を「生きて」⁽⁵⁾いなければならぬ。たんなるエソラゴトには相貌を生み出す力はない。相貌は私自身がどのように未来に向かうかおうとしているかにかかっている。それゆえ、私の手の上に宝石がないという事実は、私がその物語を生きていない以上、知覚に反映されることはない。

（野矢茂樹『心という難問』による）

問一 傍線部(1)～(5)を漢字になおしなさい。

問二 傍線部(a)「一つのものごとはさまざまに記述されうる(記述の多様性)」とあるが、どういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(b)「ただし、どんな記述でも相貌に反映されるというわけではない」とあるが、「記述」が「相貌に反映される」とはどういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(c)「上り坂」は物語の中でしか表現できない」とあるが、どういう意味か、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部(d)「いま問題にしたいのは、「見えない」ということではなく、「ないということが見える」ということである」とあるが、「見えない」と「ないということが見える」との違いを、わかりやすく説明しなさい。

II

次の文章は、正宗白鳥が大正四年に発表した小説『入江のほとり』の一部です。辰男は地方の旧家の三男で、成人した後も実家に残り、小学校の代用教員をしています。兄の栄一は、普段は東京で暮らしています。これを読んで、後の問いに答えなさい。

栄一が帰ってきたのは、予報の日取よりも遅れ遅れて、もはや誰も忘れたように、噂にさえ上さなくなったところであった。夕餐の膳が片づいて、皆ながあちこちへ別れているところへ、俣夫の提灯を先に、突如に暗い土間へ入ってきた。散らばっていた家の者はまたそろそろ出てきて一ところに集まった。勝代も物音でそれと知ると、書物を揃えて二階から下りてきた。が、辰男一人は椅子から身動きもしなかった。二三日前から作り始めた英文に心を打込んでいた。「眠った海」「無用な行為」などが、みずから選んだ課題であった。大谷が間に立って取做しかけた縁談は、ろくに話し進まぬうちに立消えになって、父の口から明らかに彼れに告げて意向を確める必要もなくてすんだが、彼れは二三日妄想に悩んだだけで、元の彼れに返って、テーブルに釘づけのようになっていられた。……

「風が吹けば浪が騒ぎ、潮が満ちれば潟が隠れる。漁船は年々殖えて魚類は年々減りつつあり。川から泥が流れでて海はしだいに浅くなる。幾百年の後にはこの小さな海は干乾びて、魚の棲家には草が生えるであらう。……」こんな自作の文章を、辞書を繰っては、いちいち英字で埋めて行つた。

以前二三度英語雑誌へ宿題を投書したことがあったが、一度も掲載されなかったもので、今はまったくそんな望みを絶って、ただ自作の英文は絹糸で綴じた洋紙の帳簿に綺麗に書留めておくに止めている。自分ながら初めの方のに比べると、文章はしだいに巧みになっているような気がする。熟語などもおりおり使われるようになった。

階下が賑わっているので、炬燵に当りに行くのを遠慮していたが、末の妹が息をせかせか吐きながら上ってきて、「栄さんのお土産」と言つて、栗饅頭を二つ机の上に置いて行つた。辰男はインキに汚れた骨太い指で抓んで大口に食べた。そして、冷くなっている手を内懷に入れて温めながらしばらく息休めをした。

妹と母とは、階下から夜具を運んで、次の室へ兄の寢床をのべた。と、間もなく栄一が上ってきたが、辰男の方をちよつと振返つたばかりで、次の室へ入つて襖を締めた。すぐには寢ないで、手紙を書いたり雑誌を読んだり、良吉が残して行つた書物を手に取ったりしていた。やたらに吸っている煙草の煙は、襖の隙間から洩れでて、辰男の顔のあたりにも漂つた。

階下が寢鎮まつてからしばらくたつて、栄一は部屋に漲つた煙を外へ出して、灯火も消して寢床についた。平生眠つきの悪いのが癖なのに、堅い寢床が身体に馴染まなくてますます寢づらかった。

「辰はまだ寢ないのか。灯火が邪魔になつていけないな」

四年目で耳に触れた兄の声は、相変らず尖つていた。辰男はその声を聞くと同時に、ペンを筆筒に収めてインキ壺に蓋をした。ランプをも吹消した。

翌日は日曜なので、辰男は目醒めても容易に起上らないで、寢床の中で書物を読んでいた。お土産の栗饅頭を一つ母が枕許に置いて行つてくれた。風もないし、障子に差した朝日は春のように麗かだった。

栄一は早く起きて海岸を散歩してきたが、朝餐後に一時間ばかり読書すると、また外へ出ようとして階子段の方へ行きかけたが、ふと振返つて、「辰。……山へ登つてみんな」と誘つた。そして、二三步辰男の居間へ踏みこんで、テーブルの上に目を据えた。

辰男は立上りざま初めて兄の顔を熟視した。……四年前よりも父の顔にいちじるしく似通つていた。兄が身体を屈めて、英作文を一二行見ている間に、辰男は帽子を被りトンビを着て直立していた。

一人はステッキを持ち草履を穿き、一人は日和下駄を穿いて、藪蔭を通り墓地を抜けて、小松の繁っている後の山へ登った。息休めもしないで一気に登つたので、二人の額からは汗がばたばた落ちた。頂上近い処にある小祠まで来て、その側の石に腰を卸した。小祠は田舎の郵便箱のような形をしている。扉は壊れて中には枯松葉が散っているだけで、神体はなかった。そこからは曲りくねつた海を越し山を越して、四国の屋島や五剣山が微かに見えるのだが、今日は光が煙つて海の向うはぼんやりしていた。

草履を穿いている兄の方はかえって足が疲れ息切れがしていたが、冷々した山上の風に汗を乾かして爽さわやかな気持ちになると、今までの沈黙を破って、弟に向っていろいろの話をしかけた。あちこちに見える島の名を訊きいたり、近くすその山の裾の村々のありさまを訊いたりしたが、はつきりした答えは得られなかった。

辰男はまるで他郷を見わたしているようで方角も取れなかった。^{*}万国史で見た西洋の天子の冠のような形をした小さい島が入江から真近い処にあるのに今初めて気がついた。入江に出入りしてくる漁船は皆その側を通っているのに、彼れはかつてそこまでも行つたことがなかった。

「あれが鍋島だ。樹がよく茂つてゐるから、あの周囲にはよく魚が寄つてると言うじゃないか」と、かえって兄に教えられたが、そう聞けば島の名前は子供の時から聞馴ききなれているのだった。

「しかし鍋よりも王冠によく似ている」と思つて、冠島という課題で英文を作ろうと思いついた。目の下の墓地も、海を渡つてゐる鳥の群も、辰男には皆英文の課題としての目に触れ心に映つた。飛んでゐる五六羽の鳥は鳶とびだか雁がんだか彼れの知識では識別みわけられなかったが、「ブラックバード」と名づけただけで彼れは満足した。

「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的があるのかい」冬枯ふゆがれの山々を見わたしていた栄一はふと弟を顧みて訊いた。

ブラックバードの後を目送しながら、「飛ぶ」に相当する動詞を案じていた辰男は、どんよりした目を瞬またたきさせた。^②「は返事ができなかった。」

「中学教師の検定試験でも受けるつもりなのか。……英語はおもしろいかい」と、兄は畳たたみかけて訊いた。

「おもしろくないこともない……」辰男はやがて曖昧あいまいな返事をしたが、自分自身でもおもしろいともおもしろくないとも感じたことはないのだった。

「独学で何年やつたつて検定試験なんか受けらりやしないぜ。ほかの学問とは違つて語学は多少教師について稽古けいこしなければ、役に立たないね」

「…………」辰男は黙って目を伏せた。

「それよりやそれだけの熱心で小学教員の試験課目を勉強して、早く正教員の資格を取った方がいいじゃないか。三十近い年齢でそれっばかりの月給じゃしかたがないね」

「…………」足許で櫛の朽葉の風に翻っているのが辰男の目についていた。いやに怪しい気持になった。

「今お前の書いた英文をちよつと見たが、まるでむちゃくちゃでちつとも意味が通っていないよ。あれじゃいろんな字を並べてるのにすぎないね。三年も五年も一生懸命で頭を使つて、あんなことをやつてるのは愚の極だよ。発音の方はなおさら間違いだらけだろう。独案内の仮名なんか当てにしていちゃだめだぜ」

「…………」

「娯楽にやるのなら何でもいいわけだが、それにしても、和歌とか発句とか田舎にいてもやれて、下手なら下手なりに人に見せられるようなものをやった方がおもしろからうじゃないか。他人にはまるで分らない英文を作つたつて何にもならんと思うが、お前はあれが他人に通用するとも思つてるのかい」

そう言つた栄一の語勢は鋭かつた。弟の愚を憐むよりも罵り嘲るような調子であつた。

「…………」辰男は黒ずんだ唇を堅く閉じていたが、目には涙が浮んだ。むろん他人に教えるつもりで読んでいるのではないし、他人に見せるために作っているのではないし、正格でないことはつねに承知しているが、全然無価値だとこの兄に極められると、つくづく情なかつた。

「さあ、帰ろうか」と言つて、栄一は裾の埃を払つて、同じ道を下つた。墓地近くなつて、のろのろ下りてくる弟を待合せで、妹の墓と祖母の墓とへ詣つた。目が窪んで息の臭かつた妹の死にぎわの醜い姿は、辰男の記憶にはまざまざと刻まれていて、妹というてすぐ思いだしたが、今墓場に立つてみると、×子の墓と彫つた新しい石碑に対して追慕の感じは起らないで、石の下で蛆に喰われている死骸の醜さが胸に浮んだ。

僧侶が投機に凝りだしてからは、寺は雨戸を鎖して空屋のように汚れて、墓場の道は草が生え木の葉の散るにまかせてい

た。兄弟は朽葉を踏んで墓地を下った。

「辰は家で許したら、学校へ入って真剣に英語の稽古をしようという気があるのかい」栄一は前とは異^{ちが}って穏やかに話しかけた。が、⁽³⁾辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしようとはしなかった。「別段学校へ入りたいということはありません」と、干乾びた切口^{きりこうじょう}上で答えた。

「せめて、もう四年も早く決心して、強硬^{おやじ}に親爺^{おやじ}に説きつけたなら、東京に英語研究に行けんことはなかったろうに。勝代さえ行くようになったのだから。……しかし、お前は今からじゃあまり遅すぎるね」

家へ帰ると、辰男はほかに自分の置く処がないようにテーブルの前に腰を掛けたが、作りかけの文章に目を向けるのが厭^{いや}な気がした。

午過ぎになると、所在^{*}なくて、文典^{*}など読みだしたが、今までのようにかたわら人なきがごとき態度ではいられなくて、兄の足音が聞えると書物を脇へ片寄せた。

*トンビ——男物の和装用のコート。

*万国史——学校などで読まれた諸外国の歴史を記した書物。

*独案内——独学用の参考書。

*文典——ここでは英語の文法書。

問一 傍線部(1)「尖^{とが}っていた」は、兄弟の関係を表す上でどのような効果があるか、説明しなさい。

問二 傍線部(2)「すぐには返事ができなかった」のはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部(3)「辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしようとはしなかった」における辰男の心情を説明しなさい。

問四 英文を書くことは、辰男にとってどのような意味があるのか、わかりやすく説明しなさい。

III

次の文章は『蜻蛉日記』の一節です。作者の母親の一周忌前後の様子を描いています。これを読んで、後の問いに答えなさい。

はかなながら秋冬も過あきふゆごしつ。ひとつところには、兄せうとひとり、叔母おばとおぼしき人ぞ住む。それを親のご思ひであれど、なほ昔を恋ひつつ泣き明かしてあるに、年かへりて、春夏も過はるなつぎぬれば、いまは果てのことすとて、こたびばかりは、かのありし山寺にてぞする。ありしことも思ひ出づるに、いとどいみじうあはれに悲し。導師だうしのはじめにも、「うつたへに秋の山辺やまべをたづねたまふにはあらざりけり」眼まなことぢたまひしところにて、経きやうの心解こころとかせたまはむ、とにこそありけれ」とばかりいふを聞くに、ものおぼえずなりて、のちのことどもはおぼえずなりぬ。あるべきことども終はりて帰る。やがて服ぬぐに、鈍色にじいろのものども、扇あふぎまで被はなはどするほどに、

藤衣ふぢころも流す涙の川水はきしにもまさるものにぞありける

とおぼえて、いみじう泣かるれば、人にも言はでやみぬ。

忌日きにちなど果てて、例のつれづれなるに、弾ひくとはなけれど、琴おしのごひてかきならしなどするに、忌いなきほどにもなりにけるを、あはれにはかなくても、など思ふほどに、あなあなたより、

いまはとて弾きいづる琴の音おとを聞けばうちかへしてもなほぞ悲しき

とあるに、ことなることもあらねど、これを思へば、いとど泣きまさりて、

なきひとはおとづれもせで琴の緒おとを絶ちし月日ぞかへりきにける

かくて、あまたある中にも頼たのもしきものに思ふ人、この夏より、遠くものしぬべきことのあるを、「服果てて」とありつれば、このごろ出で立ちなむとす。これを思ふに、心細しと思ふにもおろかなり。

*果てのこと——喪の期間が終わりとなる法事。ここでは一周忌。

*導師——法要を指揮する僧侶。

*うつたへに——ただ単に（……ではない）。

*鈍色のものども——喪服の類。「藤衣」も喪服。

*あなたより——叔母の方から。

*頼もしきものに思ふ人——ここでは姉をさす。

*服果てて——喪に服する期間が終わって。

問一 傍線部(1)「親のごと思ひてあれど」、(2)「いみじう泣かるれば」、(3)「出で立ちなむとす」を、動作主（主語）を補って

現代語訳しなさい。

問二 傍線部(ア)「眼とぢたまひしところ」と同じ場所をさす文中の言葉を抜き出しなさい。

問三 傍線部(イ)「きしにもまさるものにぞありける」は掛詞が使われています。その両方の意味を示しながら現代語訳しなさい。

問四 傍線部(ウ)「いまはとて弾きいづる」はどのような意味か、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部(エ)の歌の内容とそこに込められた作者の心情を説明しなさい。

IV

次の文章は臣下の職分と実績の関係について論じたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

昔者韓昭侯[＊]醉而寢^{ヒテ}、典冠[＊]⁽¹⁾者見^テ君之寒^{キヲ}也、故加^フ衣^ヲ於君之上^ニ。

覺^{メテ}寢^{しんヨリ}而説^{よろこビ}、問^{ヒテ}左右^ニ曰^ク、「誰^カ加^{ヘシ}衣^ヲ者^{ソト}？」左右^{こたヘテ}対^ク曰^ク、「典冠^{ナリト}。」君^{リテ}因^{ネテ}兼^ニ

罪^ス典衣^{いト}与^ヲ典冠[＊]。其^ノ罪^{＊スルハ}典衣^ヨ、以^テ為^ス失^{＊フト}其^ノ事^フ也。其^ノ罪^{＊スルハ}典冠^ヨ、以^テ為^ス越^{＊ユト}

其^ノ職^ヲ也。非^ズ不^ル惡^ニ寒^{キヲ}也、以^テ為^ス侵[＊]官^ハ之害^ニ甚^ニ於寒^ニ。故^ニ明主^ニ之蓄^{やしなフヤ}臣^ヲ、

臣^ハ不得^ズ越^ス官^ハ而有功^ニ、不^レ得^ズ陳[＊]⁽⁴⁾言^ヲ而不^レ当[＊]。越^{ユレバ}官^ヲ則^チ死^シ、不^レ当[＊]則^チ罪^{アリ}。

守^リ業^ヲ其^ノ官^ニ所^ノ言^フ者[＊]貞[＊]⁽⁵⁾也、則^チ群臣^ハ不^レ得^ズ朋党[＊]相^{あひ}為^{ナスコトヲ}矣^ニ。

（『韓非子』二柄篇による）

*韓昭侯——前四世紀頃の韓の君主。

*典冠——君主の冠を管理する役人。

*典衣——君主の衣服を管理する役人。

*罪——罰する。

*失其事——仕事を怠る。

*越其職——職分を越える。

*陳言而不当——言葉と働きが一致しない。君主は臣下が述べた意見に応じて役職を与える。言葉と働きが一致しないとは、臣下が与えられた役職にふさわしい仕事をしていないことをいう。

*貞——誠実である。

*朋党——かげで徒党を組む。

問一 傍線部(1)「典冠者見君之寒也、故加衣於君之上」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(2)「君因兼罪典衣与典冠」とあるが、「典冠」を罰したのはなぜか。本文を踏まえてその理由をわかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(3)「以為侵官之害甚於寒」を、すべて平仮名を用いて読み下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問四 傍線部(4)は「しんはくわんをこえてこうあることをえず」と読みます。この読み方に従って、解答用紙の原文に返り点を付けなさい。

問五 傍線部(5)「守業其官、所言者貞也、則群臣不得朋党相為矣」とあり、君主が臣下を治めるうえで肝要なことが挙げられているが、それは何か。本文を踏まえながらわかりやすく説明しなさい。